

日本の歴史 20

『図説日本の名城』

平井聖, 小室榮一編 斎藤政秋写真
(ふくろうの本 河出書房新社 2001年)

稲垣 宏行

日本の城は古代には音読みで「キ」と読まれていたようです。それが中世からは「ジョウ」と読まれるようになり、その後現在の「シロ」という読み方になりました。沖縄では城に当たるものを「グスク」と呼び、アイヌ民族は「チャシ」と呼んでいます。

本書は、全国に残る約90の城を幾つかのアンクルから撮った写真と復元図を中心に、それらの歴史の変遷について説明したものです。その中には姫路城や大坂城、江戸城のように全国的に知名度のある城もあれば、土浦城、久保田城、岡城のように、恐らく地元以外の人たちには聞き慣れない名前の城もあるかもしれません。本書の巻末にある「日本の城 歴史と構造」によると、少なくとも江戸時代末期までに186もの城が存在していたと言われています。

これだけ多く築かれた城とは、一体どのようなものなのでしょう。元々軍事的で築かれており、私たちが城をそういう視点だけから捉えがちになりますが、それだけが城の特徴の全てではありません。巻末にも「日本城郭の石垣は基本的には軍事的から出発しながら、独特の造形的な美しさを創り出しているのである」という記述があります。これは、城の持つもう一つの特徴を表しているようにも考えられます。

城は元々屋敷が変化していったものと言われています。代表例として、本書で皇極三(644)年に蘇我氏が自分の屋敷に柵と池をこしらえて城とした事例が挙げられています。戦国時代に入ると、屋敷に代わって山城が多く造られるようになりますが、そうなるまでは豪族や武士たちの屋敷が戦争の拠点として利用されていました。その山城も、鉄砲の出現などで

戦術が徐々に変化をしていくと、戦局に対応した石積みの方法で石垣が築かれるようになるなど、次第に私たちがイメージする城へと変化していきます。また、大きな権力を持った宗派が寺院に城郭的施設を構える事例も本書の巻末に見られます(代表例として、浄土真宗の石山本願寺がある)。

一旦戦乱が沈静化した安土桃山時代以降は、城下町としての性格も備える安土城や大坂城、伏見城のような近世城郭が登場し始め、大名たちもそれに倣って城を建築するようになりました。こうして見ると、城が単なる軍事的存在に留まらなかったのは、大名たちが時代の変化に適応できる柔軟性を持っていたからです。そして、城の元々の美も、軍事性だけでなく、芸術性や権威も求めるようになった大名らの手で磨かれ、現在の形に至ったのだと評者は考えます。

本書で紹介された城も、多くが明治時代の版籍奉還に伴い壊されました。これは、政府への反抗の拠点となる恐れがあったためです。また、その後の戦争の被害や失火、落雷などの天災によって焼失したのも少なくありません。それでも一部の城は復元工事を経て、現在私たちの目の前に姿を見せています。

城は世界各国に存在し、日本の歴史を見る上でも象徴的な存在ですが、現在では地域の名所としても重要であり、地元の人々にとって心の拠りどころとも言えます。しかし、城の景観は、その地域に直接関係がない人々にとっても文化的な観点から心惹かれるものがあります。その意味で、城は多くの人たちにとって心の拠りどころとも考えられるのではないのでしょうか。

いながき ひろゆき (司書・情報サービス課)

日本史の象徴的存在としての城